

城田 香菜子×たけふじよしも SHIROTA Kanako×TAKEHUJI Yoshitomo

Colors of KCUA2014 INVITATION -浮遊する意識-

城田香菜子・たけふじよしもインタビュー



〔過去参考作品〕

【城田インタビュー】

——制作を始めた、芸大に入ったきっかけを教えてください。

芸大に行きたいと思ったのは高校生の頃です。合唱部と美術部を兼部していて、歌っていた曲のイメージで絵をかいていました。個人的なイメージで描いていたのですが、同じ歌を歌っていた友人も同じようなイメージで歌っていたらしく、視覚とその他の関わりが気になったのがはじまりでした。

それからいろいろあって、芸術の正解が一つでない所、工芸の風土に根ざした暮らしの知恵が詰まっている所に魅力を感じて、それを広める仕事がしたいと思い芸大に進学しました。

——ご自身の出身専攻は染織ですが、なぜ染織を選ばれたのですか？

芸術をつかって人をつなげる事がしくて、大学では世界中いろいろな人が生活の中で行っている芸術活動を学びたいと思いました。世界中どこにでもあり、生まれたときから身を包んでいる布は、人類の歴史とほぼ同じ歴史があり、現代のコンピュータの考え方や宇宙船に至るまで、さまざまに応用されています。線にも面にも立体にもなる、いろいろな可能性を感じて、染織を選びました。

———現在、制作をするにあたり、影響を受けたものは何ですか。

様々な人と関わりながら作るとは、京都市芸大のミュージカル部での活動、中高生の頃にしていたボランティアサークル（小学生対象に、工作教室やゲーム大会、キャンプ等を企画しておこなう）の影響が大きいです。

資源の有効活用という点では、大学で学んだ世界各国の工芸の知恵や、京芸のある西京区の自然豊かな環境に影響を受けました。

———展覧のテーマ「招き」についてとくにどう思われますか。

「招く」ことは、私の創作活動にとっても重要なテーマです。

芸術や創作活動が、一部の芸術好きな人のものではなくて、みんなの生きる知恵として機能して欲しいと思っています。

なので私一人で完結する形ではない作品を作ったり、アートをスペースをひらいたりしています。

———「芸術がみんなの生きる知恵として機能していく」ためには誰が何をしなければいけないとお考えですか。

端的にいうと、ひとりひとりが感謝の気持ちを持つことだと考えます。例えば、Aさんがやっているお店のチラシを、友達Bさんに作ってもらったとします。ここで「てきとうで良いからタダで作ってほしい」と頼むような場合がよくあるのですが、これはよくない。Bさんは作る腕前を商品にしているのですから。てきとうにタダで作ってくれたという事が広まってはいけませんので、てきとうには作れません。しかしAさんはBさんにお金を払えば良いということではないと思います。私がベストだと思うのは、Bさんの欲しいものをAさんが作ってあげること。直接できなかつたら、別のCさんを介してもいいかもしれません。

———ワークショップ形式で作品を作り上げる上で気を付けていることはありますか？

参加する人が、できた作品だけでなく、作る過程で感じたものも持ち帰って、あとで思い出してにやっとできるものにしたいと思っています。

———今まで多くのアートイベントをディレクションしておられますが、一番ターニングポイントになったイベントは何ですか？

強いて選ぶなら、2013年2月におこなった音の展覧会です。

それまで4回行った、展示×演奏会で関わった芸術家と音楽家が、改めて集まり、最新の活動を発表しあいました。

実は一旦活動をやめようかと思っていたのですが、そこで沢山の応援の声をいただいたので、こうして今も続けてこれています。

———今回はたけふじさんとのコラボレーションですが、彼の制作についてどう思いますか？また、彼の制作から影響を受けているのはどのようなことですか？

彼の作品は、ちいさなものへの愛にあふれ、はっきりと見えないけれど人類にとって根源的な問題が、絵本やメルヘンの世界によってやさしくあらわされていると感じます。忘れかけていた大切な思い出や、捨てられそうになっていたキラキラしたものに気づかされます。材料であっても人であっても出来事であっても、この世に無駄なものはないんだろうなと思うようになりました。

———今後の展望を教えてください（制作活動に限らず）

芸術や創作活動が、一部の芸術好きな人のものではなくて、みんなの生きる知恵として機能するよのなかになるように、できることをしていきたいです。

創作活動を地域活性や社会貢献につなげられるように、創作活動をしている人がよりしやすくなるように、アートスペースあけぼのをひらいたので、まずそこでがんばっていきたいと思っています。

———お客様に一言おねがいします

お客様が創作に加わってくださったり、一緒に作る中でお話していただくことによって仕上がっていく作品を展示します。

つくりだすことは楽しいこと。ちょっと寄って楽しんでいってください。

【たけふじよしともインタビュー】

———制作を始めた、芸大に入ったきっかけを教えてください。

グラフィックデザイナーである父からの遺伝。

絵本作りはかわいい生き物やキャラクターが好きなのできづいたらしました。

芸大もきづいたらめざしてました。小学校2年生くらいの頃からだと思います。

——制作への取り組み方や作風において、ご自身とお父様とで似ている部分はありますか。

制作態度や作風に関してはよく分かりませんが、短気で変に几帳面な所は似てますね。

——現在、制作をするにあたり、影響を受けたものは何ですか。

かわいい動物のキャラクターたち。いろんな生き物たち。
ほか、多数（あまりに多過ぎるので割愛します）。

——展覧のテーマ「招き」についてとくにどう思われますか。

自分は自分自身が価値の無いもの、情けないものだとおもっていたので
この展覧会に招いていただいてびっくりしました。
今回は自分がいま、とてもお世話になってるある山中の里で見つけた
「価値のないもの」「情けないもの」を展覧会にお招きしたいと
考えております。すこしだけ、お洒落をさせて。
みてくれた人がすこしだけ、びっくりしてくれると嬉しいです。

——たけふじさんにとっての世の中にある「価値のないもの」「情けないもの」とはなんですか。

道ばたに生えている雑草の葉っぱの先の少し枯れてしなびている部分とかですかね。
あとタンスの下の埃やその辺に落ちている食後のキャンディーの包み紙などですね。

——今回は城田さんとのコラボレーションですが、彼女の制作についてどう思いますか？また、彼女の制作から影響を受けているのはどのようなことですか？

城田さんのは「制作」というより「活動」ですよ。彼女の他人に対する人当たりや性格の良さは見習わねばならないなと思います。

——今後の展望を教えてください。（制作活動に限らず）

なりゆきにまかせます。

いまは都会と田舎をいったりきたりの不思議な毎日。

たぶん、半世紀以内には宇宙に進出します。

どうなっても絵本はつくりつづけるでしょう。

宇宙一変な絵本作家をめざしています。

がんばります

——宇宙一変な絵本作家になるためには何が必要だと思いますか？

あと半世紀も経てば、民間人でも宇宙空間に進出できる程に科学技術も発達している（もし今後大きな戦争が無ければの話ですが）でしょう。地球外知的生命体との交流も始まっているかもしれませんから、そこでも通用する絵本の形を目指さなければなりませんね。

本当にいろんな勉強が必要です。最近は量子力学と建築と心霊研究に興味があります。言語の起源や農耕、幾何学、車の運転などにも興味ができました。

また宇宙を目指すのであれば、まずは日本列島や地球から制覇していく必要があると思います。まずは日本中を旅していろんな人に会う、絵本を売る。次は世界。日本国内は自転車もしくは自動車を考えています。世界に行くなら国際免許も必要でしょうか。

「変」という概念についても考えます。世界は絶えず振動し変化しています。「変」とは全宇宙の最大公約数なのではないかと考えています。ただこれについては「時空」に関して完全に理解しないといけないので今後も「変」の捉え方は変わってくると思います。

——なぜ、絵本という媒体が好きなのですか？

絵本という媒体を選んだのはたまたまです。正直、あまり好きではないです。

ただ絵本って大人になると少し大事にしたくなる感じがありますよね。本の物質感、といえますか、そこは好きです。

あと複製可能なメディアである点は大きいです。キャラクターとか物語が絵本という媒体で複製されてたくさんの読者の元に向かっていく所などは、キノコが子孫繁栄のために胞子を撒き散らしている様に似ていて好きです（たけふじの「たけ」は「茸」です）。新しい絵本が完成するたびに自分の寿命が伸びたような感じがします。

あと製本作業も好きです。ひたすらカッターを走らせる作業やパンチで穴を空け続ける作業はなんだか殺伐とした感じで心が落ち着きます。